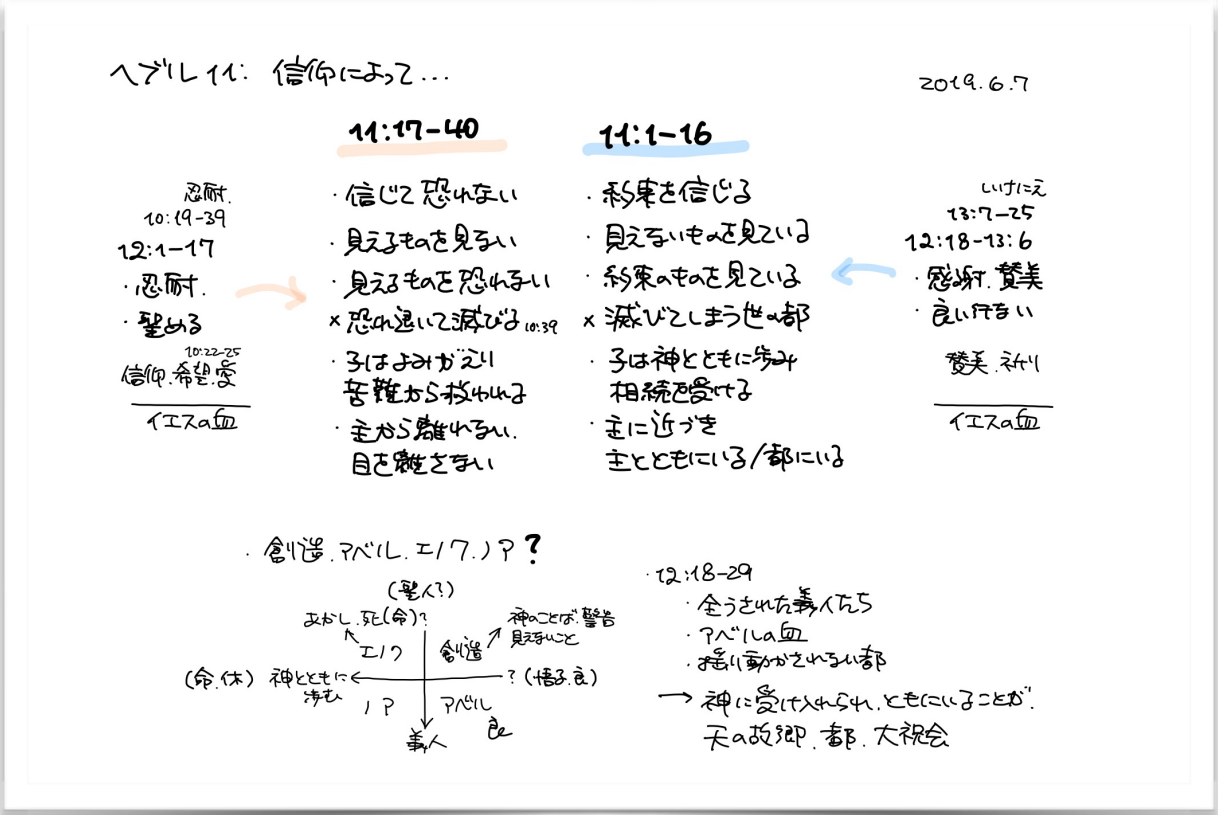
ヘブル人への手紙11:



ヘブル人への手紙の11章、信仰によってという箇所をもう一度確認しました。

ヘブル人への手紙全体の中で、1章から10章までの「信ずべきこと」と「我々が行うべきこと」というのが10章19節からのところですね。

その真ん中のところに、信仰の父たちのストーリーが2つの段落で、創造からサラ・アブラハムまでと(11:1~12)、ここに一度、天の故郷の話があって(11:13~16)、またアブラハムからラハブまで(11:17~31)、その他こういう人達(11:32~40)ということで分けられていますので、この最初の創造からアブラハムまでと、アブラハムからラハブまでのところがどういうつながりだったのかということを確認しました。

前回は、よみがえりと相続地ということを言っていましたが、特に今回問題になっていたのが創造からノアまで。創造、アベル、エノク、ノアの役割が何なのかが、ちょっと見えなくなってしまいましたので、もう一度この前半(11:1~16)と後半(11:17~40)の関係を見ながら考えました。

それでこの前半と後半。都(前半11:1~16)とよみがえり(後半11:17~40)。相続文(前半11:1~16)と相続人(後半11:17~40)と思っていたのですけど、どうかなということでその違いを表にしてみました。

片方(前半)は約束を信じる。(後半は)この約束を信じているので恐れない。(前半)目に見えないものを見ている。(後半)見えているものを見ない。世の恐れですね。苦しみ、

死、滅び。そういうものは目に見えている。その目に見えるものを見ないで、見えないものを見ているということです(前半)。約束のものを見ている約束を見ている。(後半)見えるものを恐れない。見えるものを見て恐れる人は恐れて退いて滅びます。

見えないものを見ているという約束のほう(前半)は、滅びてしまう世の栄光というものではなくて天にある栄光を見ているということですね。(後半)子はよみがえって苦難から救われる。よみがえりの話といろんな苦しみから救われること。これが後半で言われているところですね。

前半は、相続財産を受ける。相続の約束の祝福を受けるということに対してここは何だろうと。（創造、アベル、エノク、ノア）エノクとノア。エノクは神と共に歩んだと書いてあるんですね。ノアも神と共に歩んだ。「神と共に歩む」それと「相続財産を受ける」これがここの共通点、神様と共に歩んでいるということが都にいることなのかなという感じですね。恐れがありますから、神様から離れない、目を離さない。主を見ているので主に近づく。主と共にいる。これが (後半)離れない。共にいる(前半)。恐れるな(後半)。私はあなたと共にいる(前半)というヨシュアの箇所も思い出すわけですよね。「私は主から離れません」ということを言っているヨシュアにその具体的なものを見ることもできるかと思います。

どちらも、「先祖たちの信仰にならってこうしなさい」という箇所がこの周りにありますね。それとこの真ん中のところ、信仰の先祖たち、この昔に習って今これをしなさいと言われるところもありますので、この信仰の2つのものが上の段のこちら(11:1~16)ですね。この箇所がクロスしていますから、12章18節からのところに並行しているものと、最後の13章7節〜16節ですね。こういう並行(11:1~16/12:18~29, 13:1~6/13:7~16)と、よみがえり、そして次の段落12章1節からのところは忍耐の話ですね。忍耐の話は実はこの10章26節からのところも忍耐ですので、このつながり(10:26~39/11:17~40/12:1~17)、

こういうつながり(11:1~16/12:18~29, 13:1~6/13:7~16)ということをここで見てますけど、どちらも「イエスの血」。ここにもあります。イエスの血を土台にした感謝と賛美、良い行いイエスの血を土台にした忍耐、聖なる歩みということがこの周りにあります。

というような概略を見てくると、創造、アベル、ノア、エノクと言っているところはこのようなつながりかなということです。12章23節の中に「アベルの血」があります。このアベルの血の話の前のところに、行ける神の都、御使いたちの大祝会、天に登録されている長子たちの教会、全うされた義人たちの霊というのがあります。アベルは義人であることの証明を得ました。信仰による義を相続することになりました。これはノアの話。義人という共通点がありますね。エノクとノアは、神と共に歩むという共通点があったねと。アベルとエノクのところは神様が捧げ物が良いと証ししてくださった。神様が喜んでいるということが証しされています。ということですので、この証し。片方のアベルは死にましたが、エノクは死を見ることのないようにと、死について言及されてる共通点もあります。

創造とノアというところは、創造のところが神の言葉で作られたことを悟る神の言葉。ノアのところは神からの警告。これも神様の言葉ということですので、その神の言葉、警告、見えないことについての神の言葉。見えないことについての神の警告だということがここに共通しているものじゃないかなということで、全うされた義人たち。アベル、ノアの霊。揺り動かされない都を受けている。警告を与えた方を拒むというノアのところを思い出すのも、12章の18節から29節の中にありますけれども、そのような

共通点を見ると、神様に受け入れられている。神様に受け入れられ、神様と共にいるということが、この都、天の故郷にいるという状態。神様に受け入れられて神様と共にいたいということがずっとできる場所、これが約束の場所、天の都。天のふるさと、都であるということがあるので、この創造、アベル、エノク、ノアの箇所があるんじゃないかなということで、この共通点の分類の中で見てきました。

前半は、約束のほうを見ている。後半17節からのほうはその約束を疑わせようとするんだけど、そこから救われる。約束から離そうとすることと、約束に近づこうとするほう。見ている方向が違ってると。約束に約束の中心に約束に向かってるほう中心にするのと、約束から引き離そうとすることに対しての勝利。勝利があって、その地に入っていくという順番とも言えるかもしれません。ということで、今回の分析で、信仰によってという大きな2つの区分を見てみました。